

夏季フィールドワーク

——「農業体験」について——

星野 一朗

I はじめに

本学学生部では、山形県高島町で夏季フィールドワーク「農業体験」（以下フィールドワーク）を1989年から実施している。農業体験と言ってもいわゆる農作業を体験することだけを目的とはしていない。地域ぐるみで土づくりを本命とし、堆肥と良質な有機肥料を施し、化学肥料や農薬散布は一切なしに丈夫な稲を育てている高島町にある上和田有機米生産組合の農家を訪れて、農作業を体験する中から人々が大切にしている食といのちの尊厳を守る姿勢に学ぶ共同生活全体が、その目的である。本稿ではフィールドワークの実施に至った経緯と実施概要及び参加学生の反応等について述べたい。

II 実施に至る経緯

1 学生部セミナーとフィールドワーク

学生部では課外教育プログラムである学生部セミナー「環境と生命」（以下学生部セミナー）を1989年4月から実施しているが、フィールドワークも年間を通じた学生部セミナーの夏休み

中のプログラムとして行われている。学生部セミナーは、1986年4月に起きたチェルノブイリ原発事故への危機感を背景に誕生した。地球を取り巻く様々な環境といのちの問題は、学生たち自身の生き方や社会のあり方を問うものであり、同一テーマのまま1年間の休止期間を挟んで7年間に6回の年間プログラムが続けられている。一方、フィールドワークは学生部セミナーが休止した年度にも行われ、1995年度までに7回実施されてきた。

学生部セミナーは以下の6点のねらいの達成を目的として行われており、このねらいはフィールドワークにもあてはめることができる。

- ・自分の生き方について考える
- ・集団体験を通しての他者理解・自己発見
- ・知的関心を喚起する
- ・社会的な問題に関心を持つ
- ・社会に生きる人々から学ぶ
- ・国際的な視野を見につける

2 フィールドワークと高島町

1988年に学生部セミナーを実施する準備段階で、上記の6点のねらいを達成するための年間プログラム（講演会、

映画会，展示会，見学会，ビデオ上映会等）に加えて，体験学習となるフィールドワークをぜひとも取り入れたいという強い想いが，学生部にはあった。このため学生の受け入れを了解していただける候補地を模索していた。そして初年度1989年の学生部セミナーで講演会演者として交渉を進めていた白根節子氏から，山形県高島町の上和田有機米生産組合をご紹介いただき，学生部セミナーを開始する1989年度からフィールドワークとしての「農業体験」を始めることができたのである。

フィールドワークを受け入れていた高島町和田地区は，山形県南東部に位置する東置賜郡にあり，水田の他に日本一のデラウェア生産量を誇るぶどう園と多品種の果樹を栽培しており，あわせて乳牛を飼育する複合循環型の畜産農家が点在する扇状地である。面積の55%は奥羽山脈に深く入り込んだ盆地型気候で，気温較差が大きい。

また1960年代から有機農法に積極的に取り組んでいる地域で，有吉佐和子氏が『複合汚染』の中で紹介した地でもある。中でも和田地区では130戸の農家が結集し，地域ぐるみで農薬を極力使わずに数年来取り組んだ結果，現在では夏の夜にホタルが舞い，青田の朝にはクモの糸が銀の皿のように光り，秋空には赤トンボの群れ飛ぶ光景が，二十数年ぶりにみられるようになったという。

III 実施概要

図1に1995年度の事前準備から実施プログラムまでの大まかなタイムスケジュールを示した。

1 事前準備

学生部では5月に3名のスタッフが決定すると，6月上旬にスタッフによる下見を兼ねた事前打ち合わせ会を現地で行う。この下見打ち合わせは，毎年欠くことができない。何故ならば現

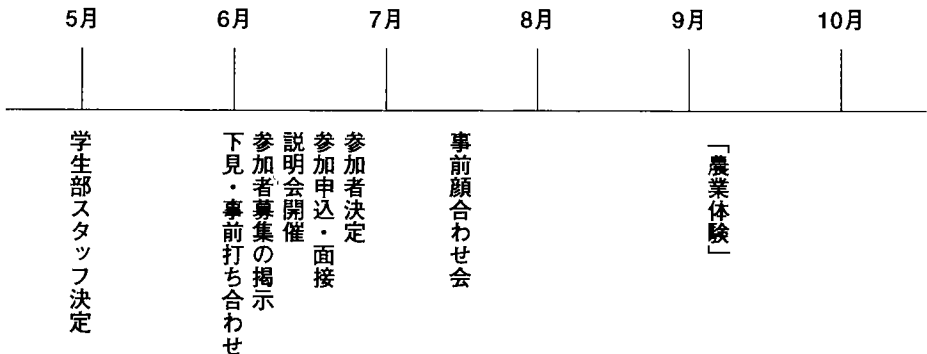


図1 1995年度フィールドワーク・タイムスケジュール

地の主なメンバーとのネットワーク作り、関係作りによってその年度のフィールドワークのプログラムが決定されるからである。例年この段階でお互いの主要なメンバー同士の顔合わせとフィールドワークのねらいをあらためて確認し合う作業を行う。ねらいを確認した後、前年度からの引き継ぎ事項にもとづき、日程及び日程内の日々のプログラム内容、受け入れ可能人数など

を確認する作業を行い、プログラム概要を決定する。

2 募集方法

プログラム概要が決定すると、ただちに移動掲示板とチラシによって学生へ参加を呼びかける。以下は1995年度の募集要項である。参加学生はすべて公募であり、6月下旬に行う2回の説明会には延べ30名から40名の学生が説明を聞きに訪れるが、募集人数が15名

フィールドワーク「農業体験」参加者募集 学生部セミナー「環境と生命VI」

主催 立教大学学生部
1995年6月

学生部では、学生部セミナー「環境と生命VI」の一環として、夏季フィールドワーク「農業体験」を実施しています。地球規模の環境破壊が進む中、地域ぐるみで有機農業に取り組んでおられる高畠町に出かけ、短期間ですが、現地の人々との生活を通して今本当に大切にしなければならぬことについて共に学んで生きたいと思えます。

興味や関心のある学生は是非、参加してください。

場 所：山形県東置賜郡高畠町和田地区

期 間：1995年9月5日（火）～9月12日（火） 7泊8日

往路 JR [山形新幹線（米沢駅乗り換え）+奥羽本線（高畠駅）]

現地解散

受 入 先：高畠町上和田有機米生産組合

（現在、130戸の農家が加盟。30～40代の青年が約70名）

宿 泊 先：和田地区民俗資料館

（茅葺きの平屋建て、約60畳の広さがある。ここで自炊共同生活をする）

募 集 人 数：約15名（本学学生） スタッフ：3名

参 加 費：24,000円（往路交通費、宿泊費、食費、保険料等）

（上記参加費の他に、帰路交通費が新幹線自由席で9,000円程度かかります）

作 業 内 容：稗抜き、サイロ造り、ぶどうの出荷手伝い、稲刈り、レタス収穫その他期間中に、温泉ツアーや地元の人達との交歓会、農家への民泊もあります。

説 明 会：6月19日（月）・20日（火）・12:15～13:00 5号館第3会議室

受 付 開 始：6月20日（火）～27日（火）学生部26番窓口にて 参加申込書・参加動機を提出の上、6月28・29日のうちで面接時間の予約をしてください。

以 上

であることを考えると興味を持っている学生は多く、フィールドワークへの関心の高さを伺わせる。また、参加を申し込む際には参加動機（400字詰め1枚程度）を提出してもらい、申し込みを終えた学生に対してスタッフ3名による事前面接を行い、6月下旬に参加者を決定している。

3 事前プログラム

参加者が決定すると、7月中旬に顔合わせ会を行う。この段階では、大多数の学生は初対面である。現地では合宿形式の共同生活となるために、お互いの顔が見える関係を事前に作っておいた方がよい。したがって顔合わせ会の主な目的は、フィールドワークに参加が決定した学生同士の関係づくりと事前学習である。

また、9月出発までの事前課題図書として1995年度は次の数冊を提示した。

- 有吉佐和子 『複合汚染』
星 寛治 『農からの発想』

星 寛治 『農業新時代』

4 実施プログラム

表1は1995年度のフィールドワーク・スケジュール表である。実施したプログラムを簡単に説明すると、学生とスタッフは、7泊8日の間、民俗資料館と呼ばれる高畠への訪問者用の宿泊施設で自炊による合宿生活を行う。

次に基本となる1日のスケジュールについて述べる。朝は午前6時30分に起床し、洗面・朝食などを済ませ、午前8時に援農先から迎えが来て、学生は2～4人ずつ援農先の方の車へ分乗し、午前と午後に農作業のお手伝いをする。昼食は援農先でお世話になり、夕食は宿舎の民俗資料館で食事当番の学生が用意した食事を全員でとる。夜間は午後8時から食環境・食物連鎖・地球規模での環境問題などの講演会がある。その他、夜間には地元の方々の交流会や感謝夕食会などのプログラムがある。

表1 '95フィールドワーク・スケジュール表

日時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
9/5(火)	東京集合			→→→福島→米沢 高畠着			資料館の掃除・買い物・入浴、夕食				特別講演会						
9/6(水)	起床・洗面・朝食	農作業			昼食・休憩			農作業		入浴・夕食		交流会(芋煮会)					
9/7(木)		農作業			昼食・休憩			農作業		入浴・夕食		特別企画					
9/8(金)		町内見学・白布温泉・昼食・他								入浴・夕食		自由時間					
9/9(土)		農作業			昼食・休憩			農作業		農家民泊(翌朝まで)							
9/10(日)		農作業			昼食・休憩			農作業		入浴・夕食		参加者同士のふりかえり					
9/11(月)		農作業			昼食・休憩			感謝夕食会準備・入浴				感謝夕食会					
9/12(火)		掃除・ふりかえり						米沢駅にて解散									

*農作業は3～4人のグループに別れ、毎日違う農家に出かける。

*作業は、稗抜き、稲刈り、ブドウ出荷用の箱作り、乳牛の飼育用コーンの刈り取り、レタス収穫等を行う。

またこのほか、期間中に1泊だけ全員が農家へ民泊させていただき、民泊先の家族の方たちといろいろな話を深めるプログラムがある。

IV 参加学生の反応

1 ふりかえりから

ここで参加学生がフィールドワーク終了後に書いてくれた「ふりかえり」から生の声を紹介したい。

「一週間本当に色々なことがあった。何から書けばいいのかと混乱しているが、できるだけ沢山書いてみようと思う。初めのうち、私は農業というものを本を通してしか知らず、がちがちに自分の中で枠にはめて、このフィールドワークに参加していた。頭では農業こそが究極の人間の職業である、などと自分で定義づけていたため、きっとその素晴らしさを十分に感じられるだろうと思った。しかし実際に最も心に響いてきたものは農業というより人間そのものであった。言葉にしてしまうととてもありきたりになるが、多くのはかりしれない出会いをしたと思う。

援農先ではいつも家族について考えさせられた。どこのお宅へ伺っても、ご先祖様の写真や肖像画が飾られ、少なくとも三世代同居、両親はたくましい自然を相手に働き、子供たちはお年寄りに育てられる。その中で自分がここに生きていることの意味を一つのつながりとして、先祖あつての自分として実感することができた。また、『人に優しくすると必ずその優しさが

返ってくるしね』と涙ぐんで話して下さったことも印象深く残っている。高島の人とは日本という国が昔から大切にしてきたものを、今でも変わらずに持っている気がする。農家の方々と一緒に仕事をさせてもらい、食事をし、お話をする内に、その顔を見てなぜか涙が出そうになることが何度もあった。生命力にみなぎる表情が今でも忘れられない。しかし、ここまで思い返してみると、それが農業だったのかもしれないと思う。知識としての農業でしばられていたが、これによってもっと農業の世界が広がった。農業体験と共に今回は一週間という長い期間の共同生活での出会いも大きかった。はしゃぎすぎるくらい楽しく過ごせることができてスタッフの方々と20人の学生、Kさんに感謝している。

もっと有機について学びたかったけれど、今回はそれ以前に人間のたくましく生きる姿にただただ感動するだけで精一杯だった。でも、きっとまた自然にこの地に体が向かう気がするので、これから時間をかけてもっと吸収していきたいと思う。まだまだ書くことがある気がするが今はここへ来てよかったと心から思う。」

「一瞬のうちに過ぎ去ったような気がするが、思い出される場面の数々は頭にこびりついて永遠の時を刻んでいるようだ。たかだか1週間のこの体験が心の中でかなりのスペースを持ち、しかも死ぬまで（いや死んでも）消えないのだろうか。

人間の生死にかかわる活動というのはひどく大事だと思う。現代人としての私達は生死についてあまり考えない。もっと言えば命についての考察というものが欠けている。僕も思いっきり欠けている。誰もがそれに気付いている。気付いていないフリをするのだと思う。それに気付いてしまうと現代社会そのものが崩壊するからだろう。

しかし人間は動物だ。動物は命の問題からは離れられない。どのような生き物もそれは同じだ。ひとり人間だけがそれから離れていく方向に向かって進むことができる。あるいは進んでしまう。そこにこそ人間の魅力があるし、また過ちが含まれているのだろう。『まっすぐに、手抜きせずに生きろよ』と若い組合員の方に言われた。その言葉を僕流に解釈すると、“人間らしく”生きろ、そういうふうになるのではないか。僕は昔から人間の“人間らしさ”はいったいどこからくるものなのか、という疑問があった。今、僕はそれが少しだけ解けた気がする。“生きる”という本能を忘れた人間が、それでも懸命に生きようとする姿こそが“人間らしさ”ではないだろうか。僕の“人間らしさ”の探究はいつも思いがけないところでヒントをつかむが、今回の体験はもっとも思いがけなかった。そして今までの経験で一番大きなヒントを頂いたと思う。僕は4年生で、今、人生の岐路に立っているところだ。覚悟はまだついていない。しかしいま、一つだけはっきり言えるのは“人間ら

しく”生きたい、という事なのだ。その事を明確に示してくれた皆さんにとっても感謝している。』

学生たちは一様に都会との違いを口にし、昔なつかしい自分の家に戻ってきたかのような暖かさを肌で感じるようである。それは高島の人々が持つ特徴であり、外部に対してひらかれた雰囲気からくるのだろう。

V おわりに

最後にスタッフとして参加させていただいた者としての私見を述べたい。

フィールドワークは体験学習型の、明らかに意味のあるプログラムである。

その第1の理由は農作業や講演などから、学生たちが自分自身の生き方と社会のあり方を、具体的には動植物のいのちの大切さを消費・流通・経済・環境問題などと密接に関連づけながら考えるきっかけを与えられる点である。自己理解を深めると同時に社会的な視野に立った物の見方や考え方を体験的に学ぶ事ができる。そこではまさに現場に生きる『人』と出会い、空間としての『場』と出会う。学生たちが大学に帰ってから、高島で感じた問題意識や疑問を、自らが主体的に追求する作業につなげていければ幸いである。

他方、第2の理由として忘れてはならないのは、学生同士が共同作業や共同生活によってお互いに関係を深める中で、学生同士に相互覚知のプロセスが生じる点である。学生たちはこの体験を非常に貴重な体験と感じるようで

あり、フィールドワークの後半には(ほんの1週間とは思えないくらい)相互性の高い小集団活動が展開される事も見逃せない収穫であろう。

上記の2点の効果は、学業や学生生活、あるいは将来に対する学生自身の積極的な動機付けとなる。と同時に、本人が自分の生き方を見つめなおしてみる、広義のOrientation(日出づる東に向く、方針の決定、適応)の意味を持つものと考えられる。

以上、フィールドワークの概要を述べてきたが、覚悟はしていたとはいえ、不慣れな学生たちや私たちスタッフに

とって、農作業はきつい労働であった。援農どころかかえって能率を下げているのでは、のスタッフの問いかけに対して地元の方から頂いた、次の応えによって本稿を終えたい。

「米を育てるのには愛情が必要だ。我々はずっと生き物を育てている。生き物を育てるのも学生を育てるのも同じで、愛情が必要なのではないか。そのためには手間ひまをかけ、ゆっくりと愛情を注げば、後は勝手に育っていくもんだ。」

(学生部 職員)

課外教育活動

フィリピンキャンプは「教育」か

——出会いのためのフィールド・エデュケーション——

西平 直

フィリピン・ルソン島北部の山の中。断崖絶壁の山道を、約7時間。マウンテン・プロビンス(山岳州)・サガダ村に着きます。マニラから数えれば、途中バギオでの一泊をはさんで、合計14時間のバスの旅。

きわどい崖っぷちでは息をのみ、通り過ぎれば拍手をし、揺れる座席のデコボコ道。みんな、何かを期待し、何かを恐れ、日本の都会の生活を脱ぎ去ってゆくのです。

サガダにつくと、学生たちは、いくつかの村に分かれます。好みや希望は一切なし。何かのご縁でめぐり合ったそのご家庭に、12日間、ひとりで泊めていただくのです。ブタ小屋わきで毎日「ライスにインゲン」を食べる家庭もあれば、カセットテープを聞きながら冷えたコーラを飲み放題の家もある。どんな家庭なのか。気が合えばいいけど。話がなくなったらどうしよう。それこそ不安と期待を胸に、ベースキャ